

第一三八回

史跡めぐり資料（鎌倉一回）

宝戒寺

東勝寺跡

妙本寺

和田塚

畠山重保の墓

安養院

主催 越谷市郷土研究会
案内人 山崎善司

史跡めぐり案内（鎌倉Ⅲ）

とき 昭和六十年四月二十九日（天皇誕生日）

集合 越谷駅前 午前七時三〇分 集合

午前七時五十六分 準急

行先 越谷駅→北千住日比谷線乗替→仲御徒町山手線乗替→東京駅横須賀線乗替→鎌倉駅下車

コース 宝成寺・執權北条代々屋敷跡→東勝寺跡・高時腹切りやぐら→妙本寺・比企能員塚
敷跡・一幡塚・比企一族の墓→昼食（駅周辺にて）

江の電鎌倉駅→和田塚駅下車→和田義盛の墓・和田一族の墓→島山重保の墓→
元八幡神社→安養院・北条政子の墓→バス鎌倉駅下車→小町商店街見学（自由）

帰路 鎌倉駅→東京駅→御徒町→仲御徒町→越谷駅→解散

案内者 山崎善司 理事 連絡先 62-13733 山崎宅

参加費 四〇〇〇円也、

但し、昼食は各自弁の事。（駅周辺食堂利用）

申込先 葉書にて住所・氏名・性別・電話番号を記入の上、越谷市弥生町一-九山崎善司まで
(四月二十五日必着の事)

主催 越谷市郷土研究会
連絡先 山崎善司
越谷市弥生町一-九

始めに

鎌倉市内の史跡めぐりはパートⅢとなりました。第一回は源氏三代の興亡と鎌岡八幡宮、第二回は北条氏創建の寺と鎌倉仏教、第三回の今回は北条氏の政権えの野望と滅亡を探るべくコースを企画致しました。

越谷市郷土研究会史跡めぐりも第一三八回を数え、研究発表も八〇回となりました。昭和三十九年十二月第一回の会合を開いて郷土研究会を発足してより早二〇年を経過致しました。初代会長大野伊右衛門氏副会長石川正氏も共に黄泉の国に旅立たれ創始者の意思も薄れて来ました。郷土研究会々員の顔触れも又当初から的人は数人となり皆新しく変りつゝ有ります。

本年一月新年会の後、郷土研究会二十周年記念事業として何か記念となる行事との事で、越谷市史上必ず通らねばならぬ「会田家」のルートを探訪する会を催す事に決定致しました。今秋十月上旬バスで一泊と言う事で予定致して居りますので、是非奮つて御参加お待ち申上げます。

鎌倉パートⅢ「北条氏の政権への野望と滅亡」と題し

ましての企画に対し越谷市との関係を問われました。直接の関係は有る様な無い様な問題です。然しながら越谷市の歴史研究の上で一番問題になる事は歴史的資料の少い事です。この歴史的資料の少い中で、路傍の石・青石塔婆・曲りくねつた旧い道・小さな祠・朽かゝつた社等それに歴史が有るはづであるが、今は語る人も無く

開発の波に消え様としています。之等は郷土の先人達が歴史的支配の変遷の度に生死を分けた苦しみの中から生れたもので有つた事と思ひます。之等の苦しみや楽しみの現れとして残る物それが、路傍の石仏であり青石塔婆であり古くから伝はる行事であります。が歴史的事実としての伝承が伝はらず消えてしまい今日では知る由も有りません。

「すは鎌倉の御時に、いの一一番に馳付ける」為には鎌倉街道が有つたはずであり、「承久の変」「文永・弘安元寇の役・元弘の乱」等の時の戦死者のものと思はれる青石塔婆が騎西郡各地に建てられている。又南北朝期には、南朝新田方に味方した領主の地には南朝年号が、北朝足利方に味方した地域には北朝年号が記された供養塔が見える（越谷新町二丁目八幡神社には北朝年号文和2年有り）。この様に鎌倉期中央に起つた大事件に付いての記述には歴史上越谷の地名や人物名は出て来ませんがその当時越谷市の西半分に拠住した古志賀谷氏は野与党（武藏七党の一つ）の一族であり、又東半分は新方の庄と言ひ、北条氏一族の金沢氏の所領であり（頼朝一政子一金沢実時一貞時一称名寺領と変遷する）、城内に称名寺名の寺もある。

市内三ノ宮に一条院がある。北条政子の開基と伝えられる。伊賀氏の隠謀（北条義時の後妻伊賀氏は兄光宗と謀り現将軍を廃して娘婿で参議一条実雅を将軍に、腹から生れた政村を執権に仕様と策謀したが露頭する）に関する事したものが不明であるが、一条実雅は殺されている。史跡めぐりの行先選定も困難となつて来た。又三代目

の育成にも努力しなければならぬ時期に来ています。郷土史研究には色々方法がありますが、資料の少い場合には、先づ仮説を立て、関係の有りそうなものを集めるとその中から真実が浮び上つて来る、歴史の流れを大きく捕えて行くとその中に新発見があるものです。次の研究科題として、或る程度冒険でも次の代の育成のために、問題提示も必要である。良き後継者の現われる事を期待致します。

昭和六十年四月二十九日 理事 山崎善司



鎌倉市

鎌倉市は奈良・京都の両市と共に、我が国の代表的な国際観光・文化都市として知られている。市域は県の南部、三浦半島の基部を占め、南東を逗子市、北は横浜市西は藤沢市に接し、南は由比・七里ヶ浜で相模湾に面している。

昭和十四年十一月、鎌倉・腰越の両町が合併市制を施行して鎌倉市となる。同三十三年深沢村と大船町を編入して今日に及んでいる。

市内には一五〇mを最高点とする、一〇〇m前後の丘陵性山地が広く分布し、東南部・北・東・西の三方を山地に囲まれた瀬戸谷の埋積低地に中心市街地が形成される市街地の周囲には、やつ・やと等と呼ばれる、多くの奥深い谷地が見られ、家並の略中央部を割つて滑川が南へ流れている。市街地の南部は、由比ヶ浜の砂浜海岸が相模湾へ向つて開けている。

鎌倉の歴史

鎌倉の名が文献に出て来るのは、天平七年（七三五）の一相境國封戸租交易帳に「鎌倉郷」とあるのが最初である、「吾妻鏡」にも「由比郷」「小林郷」などの名が見えるが、その範囲・沿革等は明らかでない。

康平六年（一〇六三）源頼義が、鶴岡八幡を由比郷に勧請し、同義朝は龟ヶ谷に屋敷を構える等、平安末期には源氏の鎌倉進出が自立つが、治承四年（一一八〇）頼朝

が本拠を置くまでは、淋しい農漁村に留まつた。

頼朝は、鶴岡八幡宮を大臣山のふもとに移して源氏の守り

所とし、若宮大路を設けて街道を整えた。平氏を滅ぼし、奥州を平定、征夷大将軍に任せられた頼朝が、我国最初の武家政権「鎌倉幕府」を開いたのは、建久三年（一一九二）、幕府の役所は鶴岡八幡宮の東方の大蔵に設けられ、山の手の東御門・西御門・小町・雪ノ下あたりには、武将の邸宅が多く、材木座・大町・坂の下附近が下町であつた。

貞応二年（一一二三）源光行は、当時の由比ヶ浜の風景を「千万字の宅軒を連ねて、大浜のわたりに異ならず」と云えている。

頼朝の死後正治元年（一一九九）は、外戚の北条氏が実權を握り、元弘三年（一二〇三）新田義貞に滅ぼされるまで一〇年間北条執権時代が続いた。頼朝が幕府を開いてから義貞が鎌倉を攻めるまでの約一五〇年間が、鎌倉が最も繁栄した時代であり、鎌倉を中心に日本の政治が動かされた鎌倉時代である。

当時の鎌倉が、如何に壯麗で活気にあふれていたかは、古典の名著として知られる「十六夜日記」「関東記行」「海道記」等にも書き残されている。

室町時代には、関東管領と称して足利基氏・氏満・満兼・持氏等四代に渡る足利氏が鎌倉を治めた。源宗五山等の寺の建設が行なはれたりしたが、間もなく執事の上杉氏に威勢を奪われた。上杉氏も山ノ内・扇ヶ谷の二派に別れ分裂して抗争、鎌倉は争乱のちまたと化した。特に康正元年（一四五五）駿河の今川範忠が鎌倉に侵入して社寺邸宅を焼き払い、公方足利成氏が古河へ走つてから

は袁徵の一途を辿り、後北条氏の興隆と共に、小田原にその繁栄を譲つた。

江戸時代には、東海道藤沢駅宿の経済圏に属し、幕府の直轄地として代官所が置かれ、中期以後は將軍徳川家斉公の鶴岡八幡宮の再建等があつて大寺社への参拝客が増えたが、町そのものは、世間から忘れ去られた一農漁村に留まつた。

明治二十一年横須賀線の開通、同三十三年江ノ島鎌倉観光電鉄の布設、更に大正十四年の横須賀線の電化に恵まれ避寒・避暑の別荘地として急速に発展した。特に第二次大戦後は、京浜地区の衛星都市として、一般住宅地の宅地造成が著しい。市域北部の大船・深沢地区は京浜工業地帯の延長として工業地化が進展している。

昭和四十一年には、宅地化から古都の風致を守る為、奈良・京都と計り「古都保存法を成立」させた。又“鎌倉文士”で総称される、作家・画家・工芸家・学者等、鎌倉に在住する文化人も多い。

市内には、九月の“流鏑馬”で知られる鶴岡八幡宮を始め、長谷の大仏・鎌倉五山と呼ばれる、建長寺・円覚寺・寿福寺・淨智寺・淨妙寺や、源頼朝の墓等、鎌倉時代の社寺史跡が多く、四季内外の観光客の訪れが絶えないし、由比ヶ浜・材木座の海岸は、夏期には文字通り足の踏み場も無い程の海水浴客で賑わい、七五〇年の伝統を継承する鎌倉彫の土産品は輸出品としても珍重されてい



北条氏の政権への野望と滅亡

北条氏の出自は、「尊卑分脈」では東国の有力者平直方の子孫と云う事になつてゐる。伊豆の西北部、狩野川沿いの、現在北条と云う地名の有るあたりを拠点とした豪族と見てゐる。時政時代の北条氏は、平凡な東国武士の一人に過ぎなかつた。北条氏の領地は極く狭い地域に限られたものであつた。

頼朝の挙兵 この北条氏が何故頼朝の旗挙げの戦いに、中核的存在となつたのか、言う迄も無く娘政子が頼朝の妻であつたからだが、当時平清盛の家人であつた時政が流人の頼朝との結婚には反対している。田舎娘の政子が都会風の美男子の頼朝に、すつかり魂を奪われてしまつたのであるが、時政は流人の頼朝と忍び合う様になつた娘の政子との関係を知ると激怒し、頼朝に合う事を禁じる一方、山木判官兼隆との縁組を取決め、或る夜嫌がる政子を無理やり兼隆の館へ送り込んだ。その夜政子は風雨の激しい晚であつたが、山木の館を抜け出し、伊豆山の湯走山櫻現に居た頼朝の懐に飛込んで行つた。政子は強い意思と燃る様な情熱の持主であり、それは生涯変わなかつた。頼朝の資質を高く買つていた時政は、娘の恋心に負けて、以後密かに彼の後楯となつた。

二人の間に女子が生れ（大姫）数年後、俄に世の中の風向が変つて來た。

治承四年（一一八〇）四月以仁王の令旨が頼朝の手許に届けられた。五月源頼政が兵を挙げたが、平家方と字も挙げ、手始めに先づ恋敵の山木判官兼隆を襲い、首尾良く討ち果した。旗挙げに集まつた同志や家来を集めても數十人であつた。此れが歴史を変える大変革の起点と成らうとは、時政自身思つても見なかつたに違ひない。第一戦は成功したが、平家方軍三千、頼朝手勢三百で石橋山に戦い敗北安房に逃れ、此處で勢力を盛返して鎌倉に本拠を定める。十月二十日平家軍と富士川に對陣之を走らす。頼朝は鎌倉に引返し関東の掌握に専心した。

寿永三年（一一八四）一月二十日、木曾義仲を宇治・勢多に破り、栗津に義仲を敗死さす。

寿永三年一月二十六日、御白川法皇より平家追討の命を受け、之を攻め一ノ谷の戦に勝利を納める。

寿永四年（一一八五）二月十九日屋島の合戦に勝利、平一宗盛は安徳天皇を奉じて海上に逃れる。

三月二十四日墺ノ浦に平家軍を破る。平家一門は破れて海に沈み、安徳天皇も共に没して、平家は滅亡す。

北条氏は此の間、鳴かず飛ばずである。平家追討には子の義時が出陣、手勢も少く特に手柄も樹てずに鎌倉に帰つてゐる。

北条時政は此の間、鷹狩時代の間頼朝の側近として勢力を貯えつゝあつた。時政は少しづゝ地歩を固める為、先づ結婚政策を取り、政子の妹を下野の豪族足利義兼に嫁がせ、次を稻毛重成に、次を畠山庄司重忠に、その次を義経の兄阿野全成に、時政の後妻牧の方との娘には新羅三郎義

光の後胤平賀朝雅を配させている。頼朝の御威光をフルに活用した平和攻勢と言える。

文治二年（一一八六）五月十二日、源行家を和泉に逐す。文治五年（一一八九）四月三十日、奥州平泉高館にて源義經殺害する。

同八月頼朝に攻められ、藤原泰衡滅亡す。建久四年（一一九三）八月十七日、頼朝は、弟範頼を伊豆に放逐、次いで殺害。建久五年（一一九四）八月十九日、幕府、安田義定（武田清光の弟）を逐す。正治元年（一一九九）一月十三日、征夷大将軍源頼朝没す。

頼朝の命により、木曾義仲の一派、源行家、弟達の範頼・義經とその勢力及び後援者の藤原一族と次々と滅亡して源家の胤が消えて行く。此処までには頼朝の猪疑心の深さによるものと一般に言はれている通りだが、それでは頼朝の死後は収まつたであろうか、否頼朝の血統が絶え、弟達も全滅し、此等の御家人達が次々と消されて行く事を見れば、そ處に一貫した作意が穿わられるのである。

頼家時代

正治元年（一一九九）一月二十六日、頼家家督を嗣ぐ。同十二月十八日、頼家、梶原景時を追放。正治二年（一二〇〇）一月二十日、梶原景時・景季是一

族と共に京へ逃れる時、駿河の清見関にて、追手の三浦村政と戦い、一族敗死して梶原一族は滅亡した。

北条時政は、木曾義仲討伐・平家追討と一連の裁いが終つて、外交の季節が到来すると俄然その手腕を發揮し始める。

弱少豪族に過ぎなかつた時政が、鎌倉を代表して上洛し朝廷や公家を相手に外交手腕を發揮する。鎌倉武士の権利を主張し、日本国内の軍事警察権を掌握して地固めに成功する。北条家は、武力よりも寧ろ外交手腕で、じわじわと頼朝側近で勢力を貯えて来た。

頼朝が死ぬと、頼家が將軍となる。之に伴い比企氏が浮上して来る。比企禪尼は頼朝の乳母であつた縁で、頼朝と政子の間に男子が（頼家）生れると、尼の娘で比企能員の妻となつた女性が、乳母となつてゐる。頼家が成人すると能員は娘を（若狭局）近づけ、やがて一婦が生れる。

将に比企時代の到来である。時政は一步後退して無念の涙を呑む、その内に頼家が重病にかかり危篤に陥つた。若し頼家に万一の事が有れば、後を嗣ぐのは若狭の生んだ一婦と云う事になる。そうはさせじと時政は思つたであろう。

建仁二年（一二〇三）六月二十三日、頼家、阿野全成（義經の兄で父義朝が美濃国青森宿の女郎延寿に生ませた子）を殺す。同年八月二十八日、頼家病み明日をも知れずとなる。頼

家の全然知らぬ間に、幕府は関東二十八ヶ国の地頭職・総守護職を頼家の子一幡（乳母が比企氏）に、関西三十八ヶ国の地頭職・総守護職を弟千幡（後実朝乳母北条氏一）に譲る。

同年九月二日、之を不服とする比企能員は、北条時政・義時を除かんと謀る。政子は時政に告る、時政は法事に事寄せて能員を我が邸に呼寄て謀殺し、北条勢は一幡の館を急襲し之を焼き攻める。一幡は炎の中に若狭と共に小御所にて死んだ。比企一族百余人は一幡の館に楯籠るが鎮圧されて滅んだ。

同年九月二十九日、頼家は、奇跡的に病気回復、此の事を知り、時政を討うと企てたが、返つて捕えられて伊豆修善寺に幽閉される。

元久元年（一二〇四）七月十八日、伊豆修善寺に幽閉されている頼家は、時政の向ける刺客に殺害された。元久二年（一二〇五）六月二十二日、時政は後妻牧ノ方との娘の婿平賀朝雅のざん言を信じ、畠山重保を謀殺した。

將軍実朝の妻に、坊門信清の姫を申し受る為に、重保が上洛した時一行と共に、平賀朝雅の邸にての酒宴の席で重保と朝雅との間に争論があつた。此の事を根にもつてのざん言と云われる。

畠山重忠は、直ちに申し開きの為、武藏より出向く所を時政の子義時の追討を受けて、武藏二俣川にて迎え戦い敗れて戦死した。義時は重忠の首を見、謀叛の心は無かつたのでは無いかと言つた。

之により頼朝以来の有力御家人である梶原景時・比企能員・畠山重忠とその一族を次々と滅亡し去つた。

時政の梯にて元服し、未だ幼少の為政子が後見となり、時政が執権として幕府の実権を握つた。

実朝時代 建仁三年（一二〇三）兄頼家重患の為、関西三十八ヶ国地頭職・総守護職を相続、頼家が将軍職を退けられると、代つて政子・時政に擁立されて朝廷から実朝の名を賜わり征夷大将軍に任せられる。

時政の梯にて元服し、未だ幼少の為政子が後見となり、時政が執権として幕府の実権を握つた。

頼家の後を嗣いたのが実朝である。乳母は政子の妹謹岐局（全成の妻、建仁二年に頼家に殺されている）である。彼女は実朝擁立を推進すべく陰に廻りかなり工作している。そして北条一門は挙げて実朝擁立を推進し、此処に北条体制が確立し、時政は「執権」となり幕政を掌握するが、牧ノ方の情に負けたものか？

斯くて、時政は、娘政子を躊躇利用して永年に渡り兼謀して來、此處に到りようよう完成して幕府の実権を握る事が出来たと見える。

即ち、頼朝を擁して最高権力者となし、協力者の弟達（範頼・義経・全成）を次々と死に追遣り、次に政子の子典・孫を、比企の勢力下にあると云う理由で殺害し、北

元久二年（一二〇五）閏七月十九日、時政は牧ノ方にそ
のかされて、実朝の暗殺を計画し、娘婿の平賀朝雅を
將軍職に擁立すべく謀つたが、躊躇して失敗に終つた。
時政は、梯髪して伊豆に隠居させられ、牧ノ方も同じく
伊豆に移された。

同年七月二十六日、幕府は在京の武士に命じて、朝雅の
討伐を命じ朝雅を誅せしむ。

義時は、父時政と後妻の牧ノ方及び娘と娘婿朝雅の勢力を
排除して、北条家内部の永年に渡る内紛を、一挙に処理して決着を付けて、二代目執権の座に付いた。先妻の
子供と後妻の子供との間の葛藤である。

義時時代 義時は、主役の座に付しや、鮮やかな政治手腕を発揮し始める。此の時義時は四十歳過ぎの油の乗つた働き盛りである。

時政の代には、姫政子が頼朝に走るのを助け、最高権力者の座に付かせ、政子を利用して源氏の血族を次々に抹殺し、その勢力に加担した者達を次々と亡ぼして、頼朝とその子のみとした。次に乳母争をさせてその背後勢力と共に一掃して葬り去り、北条一門が幕政を握る事となり、成功したが次に最も重大な懸案である、北条氏内部の葛藤による内紛を一挙に解決して、政子・義時姉弟の連続時代が到来した訳である。

何時頃から此の様な謀議が成されていたかは、計り知れないが、偶然と言えば余りにも偶然過ぎる事柄が続き過ぎる事にお気付きであろう。

和田の合戦 建保元年（一二一三）二月十六日、信濃の住人泉親衡は、和田義直・義重・胤長等兄弟と与党、一幅の弟千寿丸を奉げて義時を除こうと企てた。謀叛は露顕し彼等は捕えられた。總勢三〇〇余に及んだ。和田義盛は、上総の館に居たが、急ぎ出仕してして胤長等の赦免を請うた、義直・義重は許されたが、胤長は一族の前で面縛されて引廻わされて、義盛に対し挑発的な行為に出た。頼朝挙兵以来の侍所別当として、比企・島山無き後も、北条氏に匹敵する勢力のあつた義盛は、三浦義村の協力を得られぬ尽に、同年五月二日、兵を挙げた。子息常盤・義秀等一族百五十余騎にて幕府と北条義時邸を襲撃した。

和田義盛等の襲撃を余知して準備して居た義時は、直ちに応戦し鎌倉中が騒乱の苗と化し終日続いたが、遂に敗れ、義盛は敗死し、一族は悉く滅亡した。

此の和田合戦により勝利を修めた義時は、やがて侍所別当職も北条氏の手に渡り、行政・軍事両面の権力を一手に掌握してしまう。

実頼の慘劇 承久元年一月二十七日、鶴岡八幡境内に於て実朝の首を取られると云う惨劇が起きた。

実朝は、実権の無い征夷大将軍に飽き足らず、高位高官を望み、左近衛大将・内大臣・右大臣と一年の内に昇進し、異例の榮達をした。建保七年（一二一九）一月二十七日、右大臣押質の式典の当日、積雪二尺余、行列が進み出した時、実朝の直ぐ後に太刀を奉げ持つて従つていた義時は、急に気分が悪くなり太刀役を、文書博士源仲

章に譲つて退出した。此の為義時は之の難から逃れた。実朝が神押を終えて石段に懸つた時、人影が走り「親の仇」と叫んで斬り付けた。実朝の首が落ちた、曲者は首を國んで間に消えた、太刀役の源仲章も斬り倒されてい

た。曲者は頼家の遺児公暁であつた。幼名は善哉、頼家の死後政子は、鶴岡八幡の別当尊暁の弟子とした。名を公暁と改める。その後京都に上つたりしたが、建保五年に鶴岡八幡の別当となつた。誰が実頼を親の仇と公暁に吹込んだかは諸説有つて謎である。

公暁は、実朝を討ち果し、自分が將軍の座に付く気だつた。この事に付いては三浦義村と相談してあつたらしいが、その場になつて三浦に裏切られ、その夜の内に義村の手の者に公暁は殺された。北条義時の命じたものと云われる。

かくて源氏の正統は絶えた。実朝二十八歳・公暁十九歳であつた。

であつたので、公暁は義村の館に逃げ込んだが、義時の命に抗しきれず、公暁を殺したが案するに、実朝は北条氏が乳母であるので公暁の企てに同意したと思える。承久の変にも三浦氏は誘いを拒み、泰時に従い宇治川で戰功を挙げ、元仁元年義時の後家伊賀氏の陰謀にも加担を求められたが応ぜず、北条執権家に忠誠を尽し、嘉禄元年泰時に用いられて評定衆に選ばれ、幕府の枢機に参画し、北条氏と並び称せられ、駿河守に任せられた。三浦義村は、各事件の度に誘はれ、頼られるがいざとなると、北条方に味方して身の安泰を計り、鎌倉期の変革期を上手に泳ぎ切り生き残つたものと言える。

承久二年（一一二〇）十月十五日、頼家の子洋暁（千寿丸、先に和田の合戦の発端となつた泉親衡に擁される）兵する。幕府軍に討伐され滅ぶ。（義經の兄全成の一族である）

三浦 義村 相模国三浦郡を領し、義澄の子母は伊藤祐

親の女、源頼朝の掌兵以来父義澄に従い各地を転戦、建久二年父の功により右兵衛尉に任せらる。頼家の時、結城朝光を援けて梶原景時一族を排斥し、之を駿河に追討して滅亡させる。一幡を擁する比企一族の討滅にも功有り、畠山重忠・重保父子の滅亡にも北条氏に忠誠を尽し、比企・畠山無き後も、北条氏と背を並べる程の勢力を保持し、幕政に参与した。

承久元年公暁が実朝を暗殺する時、公暁の乳母が三浦氏

承久の変 承久三年（一一二一）五月十五日、御鳥羽上皇の京都側は、公家勢力の回復を図り、討幕の宣旨・院旨を諸国に下すと共に、京都主護職伊賀光季を討ち北条義時追討を宣した。

同月十九日、幕府軍大舉京へ攻め上り、公家勢大敗した同年七月十六日、泰時・時房入京、六波羅館に駐在する同年七月十三日、反乱に加担した公家・武士を処断・御

羽上皇を隠岐へ、順徳天皇を佐渡へ、土御門上皇を土佐へ配流した。

承久の乱は、鎌倉幕府の成立により、打撃を受けた公家勢力は、正治元年頼朝の死以後、頻発する梶原景時・比企の乱・畠山氏の乱・和田の合戦等有力御家人の反乱による幕府内部の混乱と不平に乘じ、公家勢力回復を企図し、討幕の宣旨を下し

承久三年（一二二一）五月、御鳥羽上皇・順徳上皇・土御門上皇と之に加担する公家・武家を擁して、討幕の兵を挙げた。

京都守護職伊賀光季を討ち、北条義時追討の宣旨・院宣を諸国に下す。

同月十九日、北条政子・義時を中心とする幕府軍は、東海・北陸二手に分れ、それ等の兵を集め京に向い進撃

京に乱入した。討幕軍は大敗した。乱後幕府は北条義時

・時房入京し、御鳥羽上皇を隠岐へ、順徳上皇を佐渡へ土御門上皇を土佐に配流し、朝廷方に味方した公卿・公郷方武士を処断、所領三千余ヶ所を没収し、新補地頭を配置し、京都監視の為六波羅に探題の設置等の施策によつて、著しく権力を強化した。他方公家勢力は急速に衰微する。

元仁元年（一二二四）六月十三日、執權北条義時没す。

六十二歳

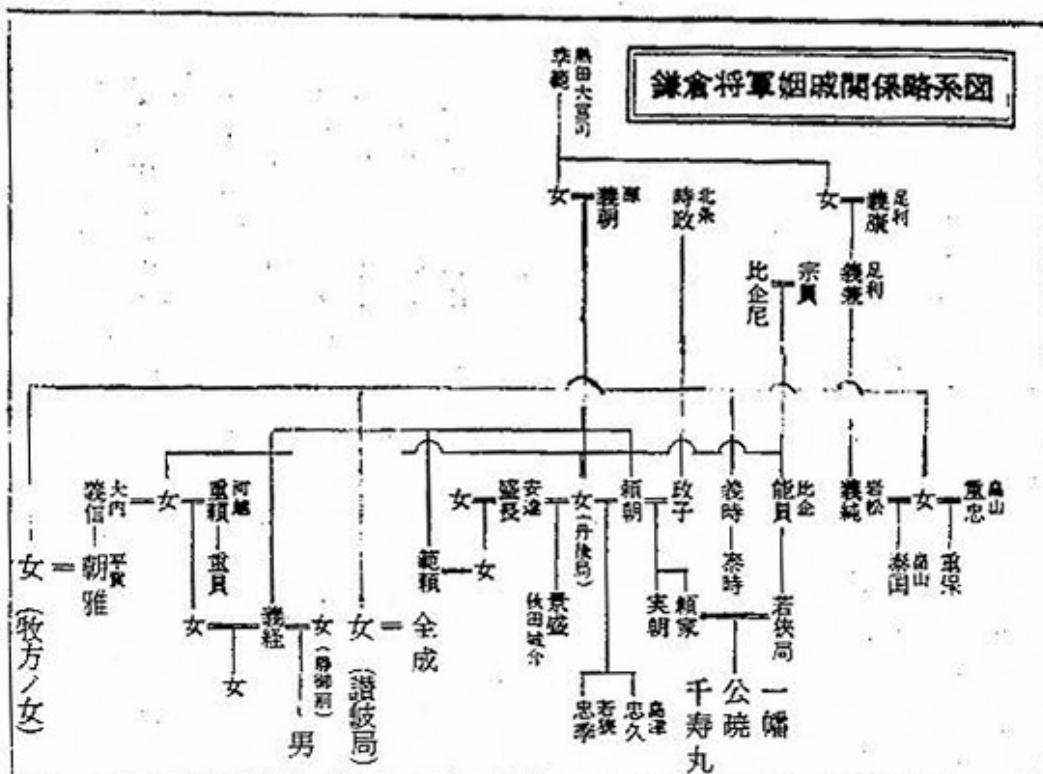
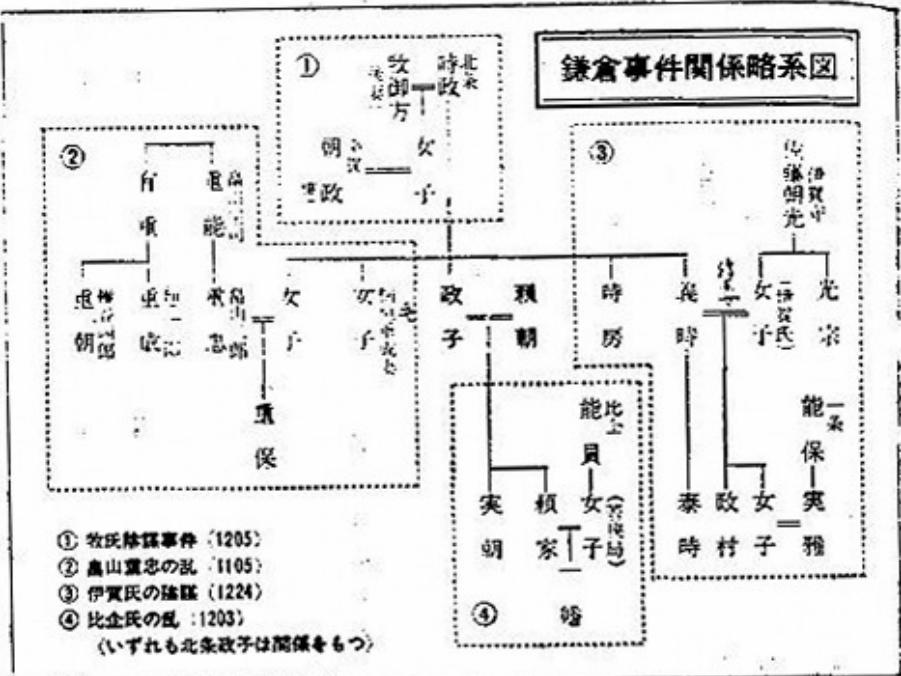
執權義時は地味な一生であつたが、終始政子を助け、協力して、地方小豪族から幕府最高権力の座に着き、益々

政治的手腕を発揮し、冷徹な迄に北条氏の安泰の為に努力し、為に父親迄も排除している。かくて以後百十年間執權北条家の安泰を見る事となる。

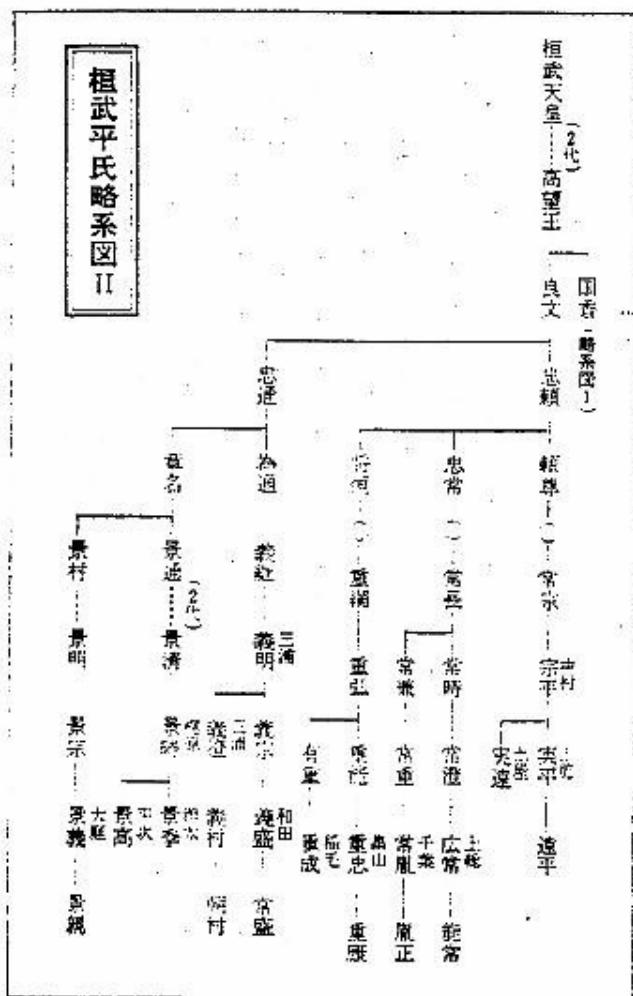
伊賀氏の隠謀 元仁元年間七月三日、義時の後室伊賀氏・弟伊賀光宗等と將軍の廃止を企て、露顕し配流さる。
義時の死後、相続の問題から義時の後家伊賀氏は、弟光宗と謀り、後家の娘婿參議一条実雅を將軍とし、自分の腹から生れた政村を執權職としようと策謀したが露顕した。義時の子泰時は既に執權職を嗣いでいたので、政子と計り、伊賀光宗の政所執事職を罷免させ、所領を没収して信濃に流し、義時の後家伊賀氏は伊豆の北条に執居させられた。

嘉禄元年（一二二五）七月十一日、北条政子没す。六十九歳

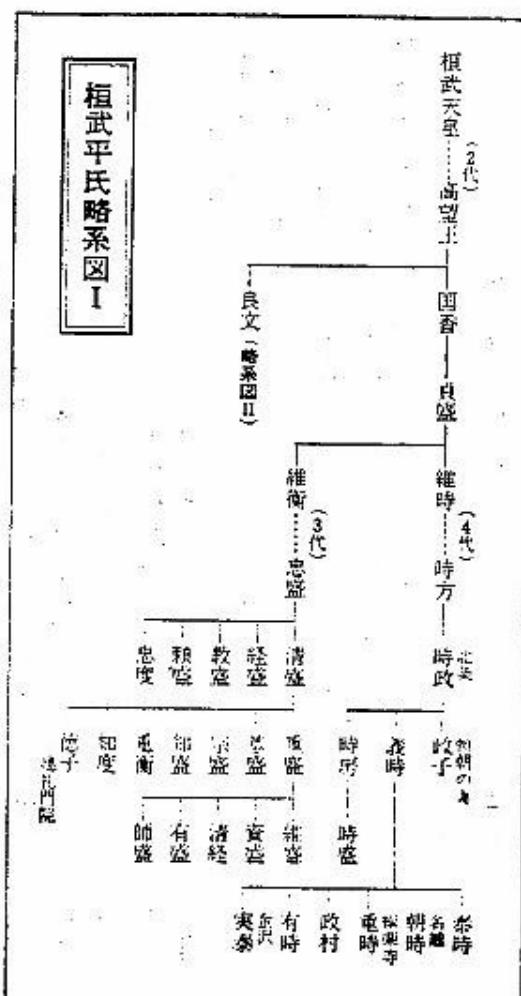
以上鎌倉府の創立から政子没する迄の、主な大事件を連記すると、全部そこには政子がいる事にお気付きでせう弟義時の助けで頼朝に走つてから、父時政後にて挙兵し頼朝を最高権力者と成してから、次々と源氏の血を滅し、その家人を消し遂には自分の子・孫迄も巻添にしてその血統を絶ち、父と義母の勢力を排除し、朝廷勢力をも放逐し、義時の死後は、後家一派の陰謀を除き、北条に刃向う者は排除して、一貫して北条家の興隆を図つた。尼将軍の面目躍如とした一生であつたと云える。



桓武平氏略系図



桓武平氏略系図 I



卷之二

北条氏系圖

史跡めぐり資料

享年四十二歳、二俣川河岸の露と消え、秩父系畠山氏は滅んだ。

畠山重忠屋敷跡

畠山重忠・桓武平氏の後胤族・畠山荘司重能の子。母三浦義明の女。子は六郎重保。武藏国男今郡畠山荘に住す。幼名は氏王丸。通称は莊司次郎。長寛二年（元久二年）（一二〇五）四十二歳にて北条義時の追討を受け二俣川にて戦死。

治承四年頼朝挙兵の時は、父が在京して大番役を勤めていた為、大庭景親に与して石橋山合戦には、頼朝の軍と戦つた。その後土肥実平・千葉常胤等によつて頼朝に帰属した。

寿永三年（一一八四）木曾義仲追討には義経の西上軍に従い宇治川に戦功を立て、次いで平家の追討には、範頼の麾下に入つたが、去つて義経に属して大功を立てた。文治三年（一一八七）所領を没収されたが、千葉胤正の救解により許されて本領を安堵された。更に梶原景時のさん言にあつたが、罪を免かれた。

文治五年（一一八九）奥州征伐には先鋒として勇戦し、その功により葛岡郡を与えられた。頼朝の信任が最も厚く、その遺託により頼家の補佐に当つた。

元久二年（一二〇五）重忠の子重保が、北条氏の縁者平賀朝雅と争つた為、重保は時政に謀殺され、重忠は時政の子義時の追討を受け、申し開きの為に武藏より急ぎ鎌倉への途次二俣川にて待伏ていた追討軍と戦い戦死した。

畠山重忠屋敷跡 鶴岡八幡宮三ノ鳥居を過ぎ、太鼓橋橋を渡り、右に源氏ノ池を大廻りして対岸より、八幡宮の西側の外に出ると、右角の一画が重忠の屋敷跡である。

政所（まんどころ） 畠山重忠屋敷の隣、八幡宮西に添つて海に向つて進むと、隣りの敷地が「政所跡」である。

幕府の政治機関。始めは公文所と称した。公文所は、「源平盛衰記」によれば、「官序は凡人にとれば公文所也」とあり、公家の家司の名称であつたから、それにより名付けられたと見られる。源頼朝が右近衛大将となり、公卿の列に入つた為に「政所」と改めた。頼朝の布達は「所下文」に統一された。

一般行政庶務を始め、鎌倉市中の非御家人・雜人の訴訟等に当つた。

別當に大江広元・今に藤原行政・執事・案主・知家事・寄人等の役職がある。

宝戒寺

北条執權屋敷と將軍邸跡　宝戒寺は、北条九代の屋敷跡で又將軍頼經以後代々の將軍の館跡で、新田義貞の鎌倉攻めにて焼失、その後建武二年（一三三五）の創建と伝え、一説には高時等が自害した東勝寺の建物を移築したと云う。

地蔵菩薩坐像（重文）貞治四年（一三六五）三条法印憲円の作、他に開山慧鎮木像や梵天帝釈像・北条高時像等もある。歎喜天（重文）は土綾があり秘仏で拝観には許可が必要。

伝義朝の墓有り、もと勝長寿院にあつたもの、変形の五輪塔である。

北条九代屋敷頼經已後代々將軍屋敷跡碑

宝　戒　寺　宝戒寺は天台宗の寺で、その入口にはやゝ大きな石塔が建ち、「唐仏地蔵尊梵天帝釈」・「北条九代屋敷頼經已後代々將軍屋敷跡」の文字が記された宝暦十二年（一七六二）の銘のある。その周りには、桜・梅・萩・つゝじ等が所狭しと植はつている。本堂の辺りまで、秋は一面の白萩が亂れ咲き美しい。

椿も多いが、萩の寺として親しまれ、境内には南北朝の頃からものと云われる大銀杏が立つてゐる。特に作つた庭でない点が、禅宗の寺と異つて却つて親しみを持たせる。

此の寺は、高時自刃により滅び去つた北条一族の怨靈を醍醐天皇が足利尊氏に命じて高時の旧居跡に作らせた

ものと云われる。

天台宗、比叡山延暦寺末である。開山は忠鎮、創建は後醍醐天皇で本尊は木造地蔵菩薩である。開山は名目上は恵鎮と云う事になつてゐるが、實際は尊氏の二男、普川国師惟賢が開いた寺である。



▲十四代執權北条高時像(仮日庵禪)

青砥藤綱屋敷跡 東勝寺橋の手前左側が青砥藤綱の屋敷跡と云われている。橋の袂に石碑が立ち、青砥藤綱が銭拾文を川に落したので、五十文の松明を買つて来て錢を拾はしたと云う話しさは、此の辺りである事を告げてくれる。

東勝寺橋 街の中の渓流滑川に懸る橋。滑川の橋の上より望む風景は、春も秋も緑や紅葉が美しく、鎌倉唯一と言ていい渓流美を漂わせている。

葛西ヶ谷 東勝寺跡のある谷を呼んでいる。かつて葛西氏の屋敷があつた谷なのでそお呼ばれている。

葛西三郎清重 葛西三郎は、秩父氏の分流にて豊島・江戸・川越氏等一族である葛西ヶ谷の名は、頼朝が石橋山から安房に逃れた頃に主従関係を結んだ、葛西三郎清重の領地に由来する。

東勝寺跡 青龍山と号し、開創期は不明であるが、開山は退耕行勇、開基は北条泰時と伝えられる。東勝寺は、元弘三年（一三三三）五月二十二日新田義貞等討幕軍の猛攻に抗して、此處に楯籠つた。高時等の鎌倉方は燃え盛る府内を見下し乍ら自刃して果てた、鎌倉幕府終焉の地として余りにも有名である。

東勝寺跡

東勝寺は、その後も関東十刹に名を連ねる等寺勢を保つたが、文明年間頃廃絶されたらしい。

葛西ヶ谷は、全体として三つの支谷に分れるが、東勝寺の寺域は谷全体に渡るものと思はれる。近年その一部が発掘調査され、山腹を人工的に削平した岩盤に各種の建築遺構が確認され、鎌倉期の遺構には、その上に分厚く焼土や木炭の層が堆積し、元弘の合戦による火災の事実を証明している。

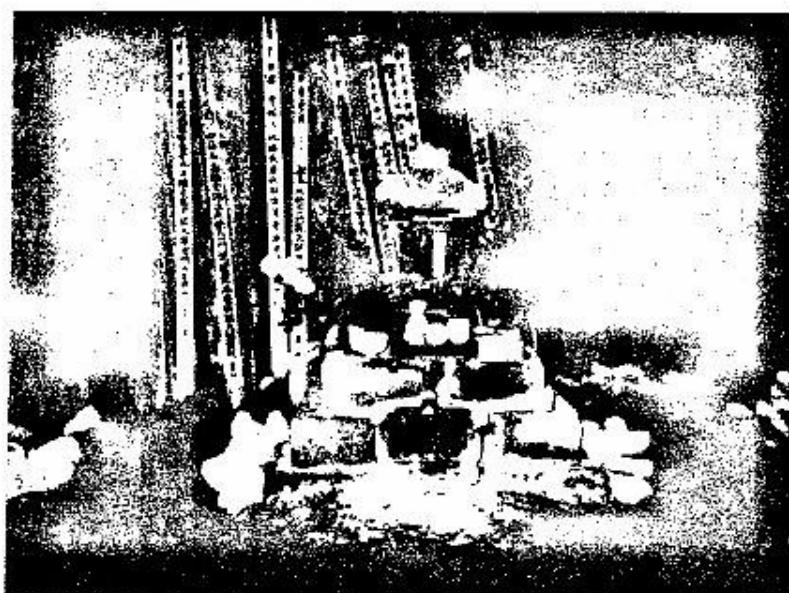
建築遺構だけでなく、此に通ずるスロープ状の石敷道や石垣状の遺構が検出され、単に寺院跡としてだけでなく城塞的要素が極めて強い遺跡である事が確認された。此れ等の焼土の中より鎌倉期の瓦に北条氏の家紋である三ツ鱗紋のある平瓦が発見され、伝承の通り此處が東勝寺跡にほぼ間違いない事が判明した。

尚葛西ヶ谷を取り囲む山陵部には至る所に堀割り・切岩・平場等が連続して見られ、全体として滑川を大手の堀に見立てた山城的防衛施設が整えられている。

中でも宝戒寺裏手の滑川東岸にそびえる山陵は、小字が堀風山と云い、踏査すると陸線を一メートル程残して両側から削り落され、東側根部に相当する場所には堀風山を独立峰とする様に削られ、東側下には現在修道院が建つ支谷が広がり平場となり、遺跡を包蔵する地形となつてゐる。堀風山の北西側は、宝戒寺境内となり、北条高時屋敷の一角に接する。

結論として東勝寺の本体は、実は周到なる軍事的配慮の下に城塞的寺院であつたと云える。

高時腹切りやぐら 葛西ヶ谷を直ぐに登り詰め、切り立つ陵線の懷に一段小高い處に腹切りやぐらが有る。北条高時等一門の墓所と云い、元は美しい宝塔が詞されていた。下方平場一帯が高時等一族主従八百余人が自刃して滅亡した場所と云われる。此處に鎌倉幕府は終り、北条氏も滅亡して鎌倉時代は終るのである。



高時腹切りやぐら

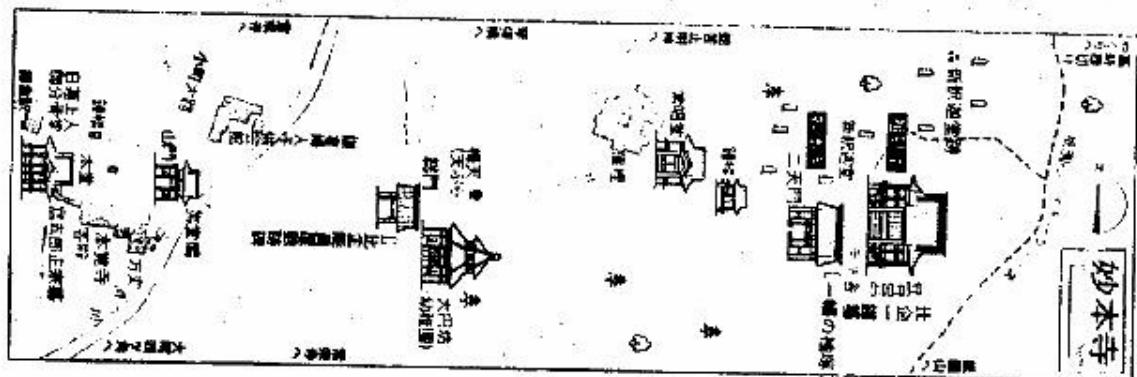
妙本寺

妙本寺　妙本寺のある谷は、鎌倉時代の有力御家人比企能員一族が住んでいたので比企ヶ谷と云う。境内には老杉が茂り、小鳥のさえずり、蝉しぐれ、虫の声など自然との触合いに事欠かない。その昔阿仏尼が時鳥の声を聞きに来た所でも有名である。

比企能員の子能本が、難から逃れ後、日蓮の弟子日朗を開山として、比企一族を弔う為に建立した。文応元年（一二六〇）開基の日蓮宗最初の本格的堂宇（法華堂）を設けた寺で、日蓮宗では「宗門発祥の道場」と称している。

総門がたわらの七角形の建物は、もと妙本寺の頭塔、大円坊で、今幼稚園として使われている。

総門を入り少し行くと左に妙本寺方丈の門がある。石段を上ると庫理と立派な常唱堂がある。尚進むと一段高く鐘楼がある。そこで総門よりの道と合して中門に至る。この当りの自然のたたづまいには、昔日の比企能員の人柄が偲ばれる優しい面影がある。中門を過ぎると本堂（祖師堂）日蓮像を安置し、左前に新釈迦堂が建つ、將軍頼家の側室として能員の娘が一幡を生んだが、比企氏の権勢を忌む北条時政は、比企能員を謀殺し、一幡も又比企一族と共に滅亡した。本堂に向つて右手前に一幡の墓・その奥に比企一族の墓四基が、苔むしている。



妙本寺略圖

比企一族

比企氏は頼朝の乳母であり、伊豆に配流中も彼の生活の面倒を見、一族比企尼は乳母を勤めた。頼朝が幕府を誕生させると、比企一族は重要され、幕政の一翼を荷負に至つた。政子が頼家を生む時には比企氏の館で産し、続いて比企氏が頼家の乳母となつて養育に当り、長じて能員の娘を近付け河波局として頼家の妻となり一幡を生んだ。比企氏は、いやが上にも源家との繋がりを深めていった。

こうした比企氏の権勢を警戒した北条時政は、北条氏族の安泰を不動のものとする為に、建仁三年（一二〇三）九月、時政は謀略を以て比企能員を殺し、一幡始め一族悉く滅亡させた。此れには政子が陰で大いに活躍したと伝えられる。

頼家惣守護職を譲る

建仁三年（一二〇三）将

軍頼家は病にかかり、身心惱乱したので、母政子の計らいで、將軍職（地頭職）を関西三十八ヶ国を頼家の弟千幡（実朝）に、関東二十八ヶ国を地頭職及び惣守護職を子一幡に譲補する事になる。頼家自身は此の事を一察知らされていなかつた。

一幡の外祖父（頼家の側室若狭局の父）として勢威を奮つてきた比企能員は、此の決定を不満として一幡を次期將軍に擁し、北条氏討滅を企てるに至つた。此の事を察知した政子は、父時政と相談して仏像供養を行うとの口実で、能員を名越の時政邸に呼び寄せた。危険を察知した一族の者達の引留も聞かず、能員は甲冑も

付けず唯白の木干の装束で出かけ、時政邸に入るや忽ち仁田四郎忠常に捕えられて殺されてしまう。

此れを知つた比企一族は、一幡を擁して比企ヶ谷の小御所に楯籠り反乱を起す。政子は直ちに、江馬・小山・和田等の軍勢を指向けて之を鎮圧し、一幡を始め比企一族百余名悉く、此の地に滅亡した。

一幡の墓

此の時一幡は、六歳であつた一幡の住む小御所も炎に包まれ、死体は焼け残つた小袖からそれと確認されたと云う。此の悲話から、本堂に向つて右手前に、一固りの木立ちの中にある小さな一幡の墓は、今も袖塚と呼ばれている。

比企一族の墓 その右裏手に、苔蒸した比企一族の墓が四基列んでいるのも、遼史の悲劇を語つてくれる。

妙本寺

此の事件から五十年後、文応元年（一二六〇）、滅亡を免れた能員の子能本が、日蓮の弟子として、此の地に法華堂を建てた。それが此の寺の発祥の由来である。

頼家の幽閉と殺害

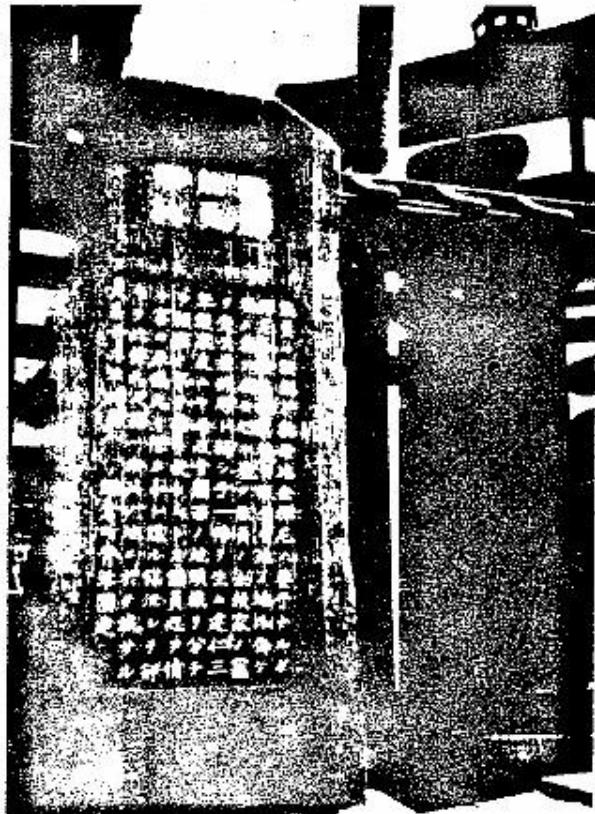
建保三年（一二〇三）九月二

日、北条時政は比企氏の権勢と対決、一気に能員を謀殺し、若狭局や一幡を含めて一族皆殺しにしてしまう。

その後頼家は、奇跡的に危篤状態を脱して之を知り、怒つて北条氏を討とうとするが、事前に事が洩れて將軍職を廃されて、伊豆修繕寺に幽閉されてしまう。

その一年後、元久元年（一二〇四）七月十八日、北条氏の放つた刺客により、暗殺されてしまう。享年二十三歳であった。

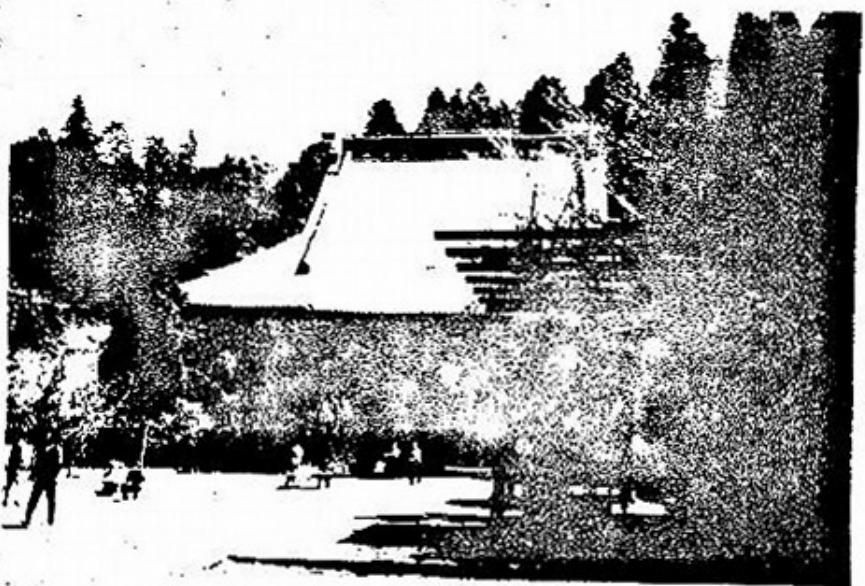
かくて北条氏の権勢は確立され、北条氏の乳母讚岐局の擁する実朝が将軍となり、北条一門で固まつた。然し、此の事件を機に、鎌倉には血生臭い争乱が、次々に起る。然もその度に、一方の中心が必ず北条氏であつた。



比企能員邸跡碑



比企一族の墓



妙本寺本堂



一 墓 の 袖 塚

和田塚

和田一族の墓 江の電で鎌倉から最初の停車駅が和田塚駅である。無人駅を出て道を右手に海岸に向うと間もなく左手に大樹に被われた中に、和田義盛とその一族の墓がある。木陰に沢山の五輪塔が並び、独特な雰囲気が漂い怨霊が今もその辺に漂う様な墓地で、今略して和田塚と呼ばれている。そこには北条時代の血生臭い歴史が秘められている。

和田義盛 和田義盛は、三浦大介義明の孫で、今の三浦市初声町和田に住み、頼朝の挙兵には、遅く参加して侍所の別当侍大将となつた武将である。比企氏に比肩する勢力で、頼家の時には、元老として十三人の評定衆の一人にもなつた有力御家人の一人であつた。源平景時の失脚や比危氏の乱等に対しても、北条氏側に立つて活躍し大きな役割を果し、実頼擁立にも北条氏方に力を借した為、次第に強力な一族を扶養するに至つた然し、それが却つて禍をなし、北条氏の実権掌握に大きな障害と見られるに至つた。

和田一族は、北条氏の遠謀に躍らされて、義盛は一族と共に叛乱に追い遣られ、鎌倉中を舞台として大合戦を繰り抜け、遂に力尽きて自滅する。その経過は吾妻鏡に記されているが、その戦の無残さを、此の塚は私達に語りかける。此の辺に道路を作つた時、おびただしい人骨が出土たと云われる。

此の附近一帯は、古い時代から無常堂塚又は、孚女塚と呼ばれる塚等が散在していて、附近から植輪等も出土している。

和田義盛一族の墓



和田一族の最後 無念の涙の内に果てた和田一族の首長、和田義盛が叛乱に迫り遣られる迄の経過は、北条氏が実權を握る手口の、最も典型的な形を示すもので興味深い。吾妻鏡に従つて詳しく述べて見よう。

建保元年（一二一三）二月十五日、千葉介成胤が法師一人を捕えて、北条義時の所に差出す。叛乱の使いの者だと云う理由からである。次の日此の法師（安念）の白状で多くの人々が捕えられた。その中には、和田四郎左衛門尉義直・同六郎兵衛尉義重・同平太胤長等、義盛の子一族が含まれて居り、張本人百三十余人、総勢三百人以上に上つた。

之等の人々は、大分前々から北条義時を倒す為に、叛乱を企て、頼家の遺児栄美を將軍に擁立しようと企てていたと云うものであつた。この僧は、こお密告した後酒を腹つて退出し、何故か行方を隠ましてしまつた。

その後、叛謀の帳本人泉小次郎親平が違い橋に隠れているとの知らせに、幕府は軍兵を派遣して捕え様とするが却つて殺され鎌倉中は騒然となる。

此の状況を聞いた和田義盛は、上総国から急ぎ鎌倉に戻り、実朝に對面して「義盛の功勞に免じて息子達を許して欲しい」と願い出た。実朝は言分を認めて之を許す。その翌日、義盛は、更に一族九十八人を率いて御所に入り、胤長をも許してもらい度いと願うが、胤長は帳本人との理由に許されず、却つて胤長は面縛されて、一族の居並ぶ中を引廻される。荏柄天神附近の胤長の領地も没

收された。

義盛は御所に出仕しなくなつた。和田義盛は地頭職を辞して出家する事態が起きる。実朝は、義盛が謀叛の準備をしているとの噂を耳にし、その真偽を御所に呼出して糾すが、義盛は勿論その気持の無い事を答えている。此の頃、義持は御家人を集め、義盛は謀叛を企てる壯を決めていると告げ、待機させると共に、使者を義盛のもとへ派遣して「蜂起等は止めて恩裁を待て」と伝える。

此の為義盛は憤怒した。その後旬日、義盛の館に軍兵が集まつていると云う噂を耳にした大江広元は、義時にその事を報告する。義時はその時碁を打つていたが、予期した如く驚いた様子も無く、静かに幕府に入り、之を政子に告げる。

遂に謀叛を決意した義盛は、その日申の刻に、大軍を率いて幕府の南門を襲う。同時に小町の義時の屋敷をも囲み、幕府の南庭に乱入して火を放つ。実朝は直ちに難を避ける。

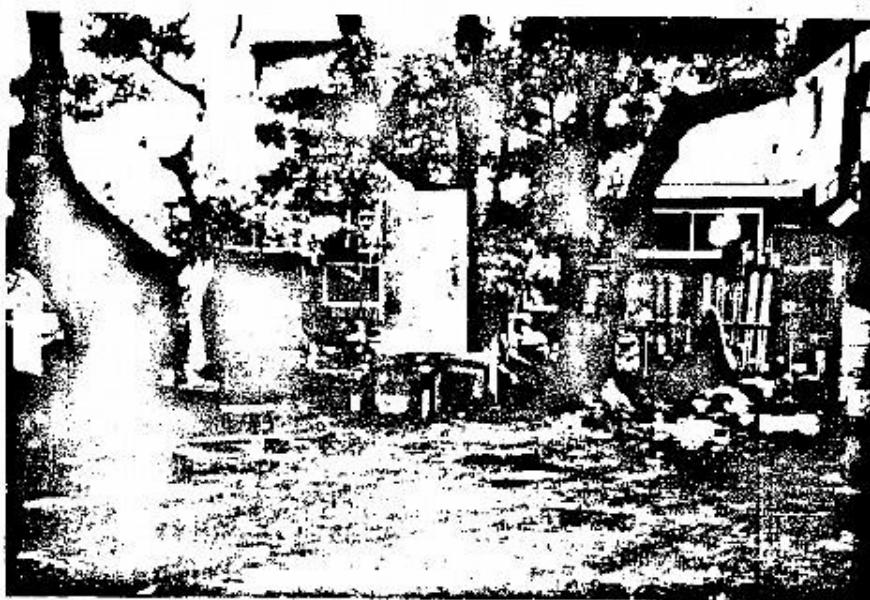
かくて、和田合戦は始まり争乱は夜を徹し、米町辻・大町大路など、到る所で華々しい打合いが続く。翌日も若宮大路・由比ヶ浜を中心の合戦が続き、幕府方は防戦の為、大評定を行う有様であつた。

然し、義盛は息子義直が討たれたと云う報が届いた為、ガックリ氣落して、今は之迄と觀念し、一族共々討て出で、戦死する。此の間に名高き朝比奈三郎義秀も華々しい戦の後討死する。

以上が吾妻鏡による合戦の模様であるが、若い息子達の慄卒さから、虚を突かれ、再三恥かしめを受けた後、追い詰められて立上つた老将義盛の無念さが、必々と偲ばれる。享年六十七歳であつた。



和田一族の墓



和田義盛一族の墓

畠山重保の墓

畠山重保の墓　若宮大路一の鳥居のすぐ近くに、畠山重保の墓が建つてある。昭和四年（一三九五）の銘を持つ高さ三米四五の大きな宝篋印塔で、市指定の重要文化財である。

畠山重保は、頼朝の御家人中最も信頼の厚かつた重忠の長男で、北条氏から叛逆の疑いをかけられて滅ぼされたその経過は、あまりにも突然で計画的であつた。

重保と朝雅との争

と間もなく、京の公家の家から妻を迎える。此の時守護として京都にあつた、武藏前司平賀朝雅は、北条時政の後妻牧ノ方の娘婿であり、畠山重保も腹異い乍ら娘婿であつた。繼母の自然の情として、牧ノ方はとかく朝雅に親しく、重忠にうとがつた。

偶々、実朝の妻を迎える為に上洛した人々が、朝雅の邸で酒宴を開いた處、重保と朝雅との間に険しい口論が起る。此の事に遺恨を持つ朝雅は、牧ノ方に畠山重忠父子は逆心があると詫言する。同時に重忠の従弟で時政の腹異いの娘婿稻毛三郎重成が、前々から重忠と仲が良く無かつた為に、朝雅方に加担し牧ノ方と共に時政に焚き付ける。

時政は畠山討滅を決意し、子の義時・時房に謀つた処、兩人は、畠山は頼朝以来忠功に勵んで来た人であるからとの理由で、父の意見に反対し討伐を思い止まる様に諫

めて戻る。

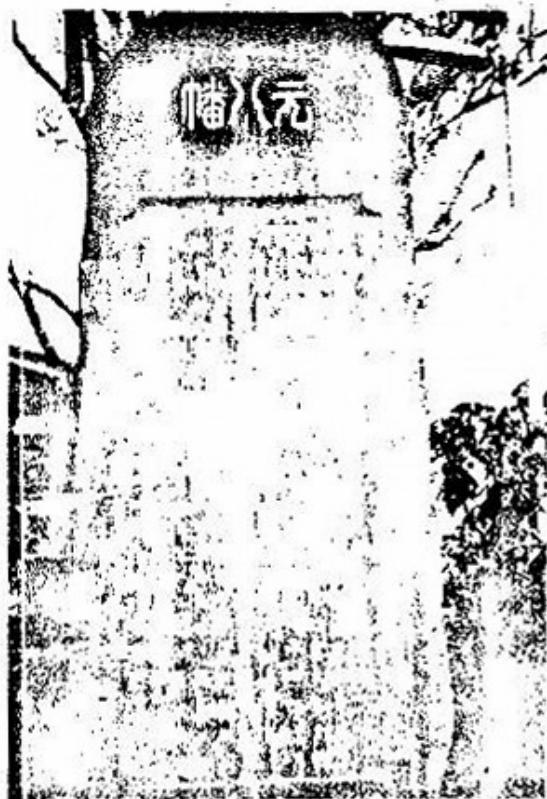
家に帰つた義時は、牧ノ方の使いが来て、重忠の謀叛は最早隠れの無い処で、重忠を庇い立てするのは、牧ノ方が繼母であるからで、牧ノ方を説者とする企みであろうと述べた。

義時は之を聞いて「どうぞ御勝手に」と答える。

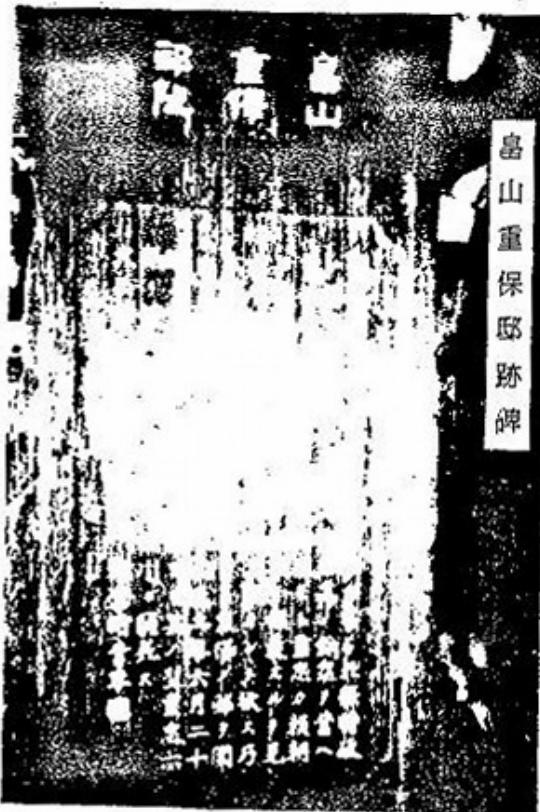
重保滅亡　此の様にして起きた事件である。時政の手の者が、今由比ヶ浜に謀叛人がいる、之を取扱えるから来てくれと呼び出し、一の鳥居迄来た時に、謀叛人は重保自身だと言はれ、三浦義村以下の軍勢に囮まれ、主従共に皆殺された。

重忠の最後　武藏国畠山荘にいた重忠は、此事を伝え聞いて、幕府に申開きをする為に、郎従百參十余人を率き連れ、鎌倉に向け出発する。義時は自ら大将となり、三万余騎を率いて、之れを二俣川に迎え討つ、重忠は、当然敗れて討死し、関東の名門畠山氏はここに滅亡した。

鎌倉に民つた義時は、時政にこう述懐する「重忠に戰場で従つた者は僅かに百余入、一族が謀叛に加担している様子は一向に見えなかつた。要するに重忠が謀叛を企てたと云う事は、全く嘘の様に思はれる。重忠の首を軒つて持つて來たが、彼の功を忍び思はず涙が出た」と、翌日、重忠の従弟稻毛重成も、三浦義村の手により、討罪された。



元八幡神社碑



島山重保跡碑



島山重保の墓全景

元八幡神社



元八幡神社全景

元八幡神社　庚平六年（一一〇六三）に、源頼義が奥州征伐の出陣を祈願する為に、京都の石清水八幡の靈を呼んで、海岸近くに社を創建して、由比の若宮（元八幡）を造営した。後賴朝が治承四年（一一八〇）に現在の處に遷座した。

横須賀線の踏切を渡ると右手に標石がある。此處は材木座・社は鎌倉と源氏との深い繋がりを物語る社である。

安養院

北条政子が嘉禄元年（一二二二五）願行上人を迎えて笠目に開いた長樂寺を、後現在地に移し寺名を政子の法名安養院に改めた、とされている。

現在の建物は、延宝八年（一六八〇）火災にあり、再興の時、比企ヶ谷の田代觀音堂を境内に移したものである。本堂には、田代信綱の守本尊を胎内に込めた千手觀音像を祭り、他に法体の政子像や願行上人像等を安置する。又本堂の後には、重文で徳治三年（一三〇八）と云う。鎌倉最古の銘を持つ宝篋印塔と並んで、政子の墓と伝える五輪塔もある。



北条政子の墓

北条政子の墓　安養院は政子の法名、本堂裏には二つの宝篋印塔がある。一つは鎌倉最古のもの、今一つの少し小さな塔が、北条政子の墓と伝えられる。

参考図書

ガイド鎌倉

郷土史資料神奈川県

ばつく鎌倉

古都鎌倉

金園社

人文社

実業之日本社

読売新聞社

理事 山崎善司
越谷市郷土研究会
史跡めぐり資料